



成長や変化がもう無く、
議長のことです。
成長が促されるのも不思議なことです。

ヨセフは後に英国に遣わされ、ブリュウー川のほとりに定住したという伝承がありま

絶望から回帰し、困難と思われる中から成長する力を与え

この5年程、本州と行き来しながら、1年の半分を四国で過ごしました。香川県は日本で最初にオリーブが栽培された場所ですが、うどん県と呼ばれるように、麦の栽培も盛んです。そういった意味では聖地と環境が似ています。麦は厳冬期に成長し、ユダ

日本では稲作が主ですから収穫というと秋の印象が強いのですが、麦は他の植物が活動を止めて眠ってしまう寒さの中で成長します。また、麦踏みにもられるように、繰り返し踏みつけられることにより

刑されたイエス様を引き取った弟子たちにさえてできなかったことです。彼は同じく議員であつたニコデモと協力して刑場からイエス様を運びました。イエス様の支持者であることを知られることを恐れていたにも関わらず。

私たちがこの三月末に受難週から復活日を迎えようとしています。しかしそれは、単にイエス様の受苦とご復活を記念することだけでは無いはず。私たちが自身が、あきらめと絶望から回帰し、困難と思わ

司祭 パウロ 上原 信幸

「キリストは眠っている者の初穂となられた」



2024年
3月号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
<https://www.nskk-kobe.org/>



発行責任者
司祭 林 和 広
印刷所
文明堂印刷所

す。聖公会の礎を築いた一人でもあるのです。カンタベリーのオーガスチンが、教会から正式に英国に派遣される五百年も昔のことです。

ただ、その前提となつてい

ニコデモも、かつてイエス様から「人は新たに生まれなければ神の国を見ることは出来ない」と諭され、年を取つたものが生まれ変わることなどできないと嘆きながらイエス様のもとを立ち去つた経験がありました。

おそらく、復活日にもこの世界では災害や紛争などの困難が解決せず、わたしたちが無力感に苛まれる状況もあるでしょう。だからこそ倦まず弛まず収穫の時まで励むことが勧められています。

(高松聖ヤコブ教会牧師)

*本文章は、聖書協会共同訳を用いています。

「倦(う)むことなく励んでいれば」は、新共同訳では「飽きることなく励んでいれば」となっています。

(広報部)

1月17日 阪神淡路大震災の関連の報告・能登半島地震への思い

司祭 イサク 坪井 智

2024年は波乱の幕開けとなった。1月1日主イエス命名の日の礼拝を終え、ホッとしているときに能登半島を地震が襲った。震度7、マグニチュード7.6と震度こそ

た能登半島のある集落の様子。過去に震災や水害で多大な援助を受けた側だから、亡くなられた方々の魂の平安を祈り、被災された方々へ少しでも早く向き合い、お返しをしたい、支援をしていきたいと思っ

変わらぬが、地震のエネルギーは兵庫東南部地震を上回っている。案の定、被害の全貌が見えてくると、悲惨な状況があった(写真は1月8日、発生から一週間過ぎ

教会の業として、イエス様に倣う私たちは、「誰が隣人になったか」「行つて同じようにしなさい」、というイエスのみ言葉をこの場所で実践していききたいと思う。当然、

私たちが力は、どんな微力になつていても、その分、多くの力を集め、沢山の人を巻き込んで、みんなで隣人になる必要があるだろう。

しかし、なかなか具体的な声が上がらない中、モヤモヤした思いを持つて、1月17日がやってきた。阪神淡路大震災復興記念聖堂の名前を持つ神戸聖ヨハネ教会は、「発生時の祈り」から、「追悼記念

聖餐式」、21日の「震災を忘れない寄せ鍋コンサート(チャリティコンサート)」まで、祈りと新たな地震災害への支援を誓うプログラムを行つた。

21日の寄せ鍋コンサートは、以前のように完全対面で音楽を楽しみつつ、能登の人たちへの支援を祈りあった。17日の追悼記念聖餐式では、吉田主教様(前東北教区主教)に説教を頂き、震災当時教区

主事として苦勞をされた事を中心に話して頂いた。主教様は、支援活動の中で、まず「祈られてること」への感謝と、祈りにより力を頂いた事、そして、教会は神と隣人に仕える共同体であり、地域とともに歩む場として開かれなければならない事を強く感じ、支援活動全般について、全ての重荷はイエス様が必ず半分は担つてくださる事を知ることができた、と話された。

29年前、私たちの重荷を多くの方々が支え共に担つてくださった(その陰にはイエス様が必ずおられた)事を思い出しつつ、私たちも、いま苦しむ方々と共に重荷を分かち合つていききたいと思う。

(神戸聖ヨハネ教会牧師)



オーガスタンの まなざし



主教 小林 尚明

『第38回外キ協 全国協議会参加』

1月25日(木)、26日(金)、広島市にある日本バプテスマト広島キリスト教会を会場に行われた全国協議会に日本聖公会を代表して参加してきました。

「外キ協(外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会)」とは、日本に暮らす外国人の人権を守るために、1987年に結成されたキリスト教「超教派」の全国ネットワークです。1998年に市民法案「外国人住民基本法」を作成し、その制定運動を進めています。参加教派としては、日本カトリック司教協議会、日本基督教団、在日大韓基督教会、日本聖公

会などです。

発題として、『技能実習』から「育成就労」へ、「外キ協38年間の到達点と第三期外キ協に向けて」など、講演として「在日ミャンマー人の現在と難民・移民基金が目指すもの」がありました。

聖書研究の中で、旧約聖書のイスラエルの民はエジプトの国で寄留者だったのだから、寄留者を自分自身のように愛しなさい(レビ記19・34)、と教えられています。イエス様自身も「枕する所もない(マタイ8・20)」と言われ、ご自身に従いたければ、居場所を失う覚悟を求められます。「イエスはこの世で居場所なき者の居場所を作るために、自ら居場所なき者となった。イエスに従う者は、決して完全にイエスに従うことは出来ないが、そのことを知りつつ、イエスは『わたしに従いなさい』と招いておられる」という言葉に大きな召命を感じました。

(神戸教区主教)

聖週(Holy Week)を過ぐす

司祭 ダビデ 林 和 広

イエス・キリストのご復活を祝う日に向けての備えの期間である大齋節において、私たちは心と身体を整えつつ、イエスがどのようにして受難の道へと向かわれたのか、また、どうしてイエスがその受難の道へと進まねばならなかったのか、そのことを思い巡らします。イエスの受難と復活の出来事が私たちの教会、そして私たちの信仰の土台にあります。その受難から復活という極めて重要な出来事を日々、思い起こすことへと私たちを招くのが復活日前の1週間、「聖週」という期間です。

聖週は3世紀にシリアとエジプトで、復活日前の2日間の断食が1週間を含むように延長されたことが始まりです。4世紀にはエルサレムにおいて復活日前の日曜日から土曜日に至るまで、伝承に従って、日々、イエスが十字架に向かつて歩まれた道、場所での出来事を記念する礼拝が行われるようになりました。

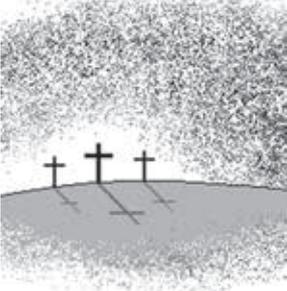
聖週の礼拝の仕方は地域によって多様ですが、イエスのエルサレム入城(復活前主日)、最後の晩餐(聖木曜日)、イエスの十字架の死(聖金曜日)、イエスの埋葬(聖土曜日)の出来事を思い起こす(記念する)ことがその礼拝の中心にあります。

ここで言う「思い起こす/記念する」とは過去にあったことを単に思い出すと言うことではありません。イエスの受難と復活を通して「良き知らせ」福音をもたらし、くださった神さまは今も生きておられ、そして、イエスを受難の死から復活させられた神さまの力強い働きは今、ここに生きています。私たちにも注がれていること、そして、この

先の未来においても変わることなくその神さまの働きがあるということを感じたいです。

今、目の前にある苦しみや不安、痛みは、神さまの働きの中に希望へと変えられていくことに信頼を置くのです。4世紀のエルサレムでの聖週の礼拝での体験を綴ったエゲリアによれば、聖週を経てイエスのご復活の箇所が読まれ、祝われた時、イエスが私たちのために甘受された多くのことを思い、皆が感泣したと記されており、私たちが同じように神さまの恵みと働きを生き活きとたつぷりと実感して、感涙のうち主にイエスのご復活を祝うことができますように。

(明石聖マリア・マグダレン)
教会牧師



鳩だより 《敬称略》

祝洗礼

2023年
9月10日(日) カタリナ山口 紗來
神戸聖ミカエル教会

祝堅信

2023年
9月24日(日) ミカエル 渡部 好正
ミカエル 小林 俊一
ヒルデガルト 與賀田 美詞
神戸聖ミカエル教会

1月7日(日) ヨハネ 竹下 瑞稀
ローザ 藤井 苑子
姫路顕栄教会

1月21日(日) ラファエル 石井 浩孝
広島復活教会

教籍異動

1月5日(金) ノア 上原 時人
神戸聖ミカエル教会より
高松聖ヤコブ教会へ

1月30日(火) イサク 鐸木 道剛
仙台基督教会より
岡山聖オーガスチン教会へ

ご逝去

1月19日(金) バルナバ 山本 稔
明石聖マリアマグダレン教会

1月21日(日) 司祭 ジョン バーグ
MtS神戸元チャプレン



4月の教区関係教役者
逝去記念聖餐式

日時 2024年4月4日(木) 午前10:30
場所 神戸聖ミカエル大聖堂
司式 主教 小林 尚明
説教 司祭 上原 信幸

* 4月の記念逝去教役者

1日	執事	パウロ	中村	四朗
2日	司祭	パウロ	鈴木	尚夫
2日	司祭	ヨハネ	小南	弘
5日	伝道師		岡井	ち
7日	伝道師		億川	八郎
11日	司祭	パウロ	広瀬	吉
11日	宣教師	メアリー	サン	ダ
12日	伝道師		井上	ト
13日	司祭		荒砥	琢哉
15日	司祭	ペテロ	小池	耕造
15日	司祭	ジョン	マクドナル	ド
15日	司祭		山内	豊吉
16日	伝道師		鶴野	瑛治
17日	司祭		堀六	郎
18日	司祭	ヨハネ	桑原	一
19日	司祭	ジョージ	ストロン	グ
19日	伝道師		高山	ゆき
22日	司祭	トマス	入交	源治
23日	司祭		村田	里
23日	伝道師	マリア・マグダレン	神崎	幸子
25日	司祭	ヨハネ	瀬山	岩
28日	主教	バジル	シン	ン
28日	主教	ジョン	マ	ン

【わたしたちのビジョン】
~日本聖公会神戸教区
宣教150周年まであと3年~
「ともに聴き 分かち合い
伝えていこう、イエスさまの福音を」

2023年11月に清里で行われた「日本聖公会宣教協議会」では、神の宣教の業に参加していく教会の教役者、信徒は、神と人びとの声を聞き、言葉や働きを通して信仰を証していくことが確認されました。

一方、昨年の神戸教区第93(定期)教区会において教区宣教委員会から各教会の牧師・信徒の皆様へ「宣教提言」をさせていただきました。これらを受けて2年後の2026年の神戸教区宣教150年に向けての宣教フレーズを「ともに聴き 分かち合い 伝えていこう、イエスさまの福音を」としました。

今、教区内の各教会では、信徒の高齢化や減少、それに伴う様々な問題が、宣教の大きな障害となっています。そのことを踏まえ、また、わたしたち一人ひとりの信仰の在り方をもう一度、学び返す良い機会ととらえていただきたく、各教会で出来ることから始めていただきたくお願い申し上げます。神様の宣教の業に教会の教役者・信徒、一人ひとりが、学び、考え、参加していくことが、解決への第一歩となります。

神戸教区宣教委員会

編集後記

今年3月末日をもって、小南 晃司祭と遠藤雅巳司祭のお二人が定年退職されます。

これまでのお働きに感謝いたしますと共に、これからの両司祭のうえに、神の豊かな祝福がありますようにお祈りいたします。(広報部)